

母たちが／と読む『母親になって後悔してる』

北村 文*

『母親になって後悔してる』(Donath 2017=2022)は、母親になったことを後悔するイスラエルの母たちの痛切な声と、その背後にある社会構造を鋭く暴きだす書である。2022年3月に邦訳が出版されると、日本でも一大センセーションを巻き起こした。本論文ではまず、日本のフェミニズムにおいて「後悔」を含む母の葛藤が繰り返し論じられてきたことを概観したあと、第一にメディア言説を分析し、本書が日本社会に対してもたらす衝撃が喧伝された一方で、「沈黙してきた母」という虚像もまた創りだされてしまったことを指摘する。第二に、フェミニスト参加型アクションリサーチの方法論から、母たち自身がこの本をともに読み語る、読書会の場を分析する。そこでの共感や対話がエンパワーメントにつながることに加え、参加者たちは「後悔」だけでなく、より複雑な日々の感情や経験を言葉にしていたことを論じ、そうした語りとフェミニスト・マザリングとの接続を見出す。

キーワード：母の後悔、フェミニスト参加型アクションリサーチ、フェミニスト・マザリング

I. 『母親になって後悔してる』

『母親になって後悔してる』は、イスラエルの社会学者オルナ・ドーナト (Orna Donath) が23名の「後悔する母たち」へのインタビュー調査から著した書である。ドーナトによる「後悔」の定義はきわめて厳密である。彼女のインタビューにこたえた女性は、みな、(a) 今ある知識と経験をもったまま過去に戻れるとしたら母親にはならない、(b) 母親であることには利益がない、あるいは利益よりも不利益のほうが大きい、と断言した女性たちである (Donath 2017=2022: 17)。これほどの深い「後悔」を語る女性たちのことはどれも痛切であり、ドーナトはそこに光を当てることで、母もまた人間であり後悔することは当然であるにもかかわらず、その事実を否定してきた社会を批判する。ドーナトは特に、「家父長制は女性を母の世界へと誘導し、資本主義は私たちを自由市場の精神のもとで絶えず進歩させようとする」

(Donath 2017=2022: 270) という二重の構造が背後にあることを強調する。

ドーナトによれば、「後悔」と「アンビバレンス」は異なるものである (Donath 2017=2022: 72-7)。母がアンビバレントな気持ちを抱くことに対しては、社会は寛容である。なぜなら、女性たちは一時的に揺れ動いたとしても最終的にはその段階を乗り越え、母であることに価値を見出すようになる、そのように「進歩」する、と想定されているからである。したがって「アンビバレンス」は社会を乱すことがない。しかし「後悔」はそうではなく、規範的な母のイメージと決別し、新たなアイデンティティを体現する。したがって、「後悔」はより対抗的であり、今こそ後悔する母たちの声を社会は聞くべきである、とドーナトは論じる。

強いメッセージを発する本書は、2016年にドイツ語で出版されたのち、2017年に英語で、そしてその後世界の15の地域で翻訳が出版された。以

* 津田塾大学准教授

下Ⅲで詳述するように、2022年3月に日本で翻訳が出版されるとすぐに、さまざまなメディアで注目された。「母の後悔」という斬新な切り口に注目が集まり、日本社会においても『母親になって後悔してる』は確かな衝撃をもたらした。

しかしながら、本論文の目的は、日本の母の後悔そのものを理解することではない。むしろ、「後悔」に光を当てようとするメディア現象が翻って「沈黙してきた母」という虚像を創りだしてしまうことを指摘し、そのうえで、『母親になって後悔してる』をきっかけとして、母である女性たちが「後悔」に限定されない、より複雑な母の経験を語り出す様態に注目する。以下では、まずⅡにおいて「後悔」を含む母の葛藤について、日本の研究者たちがどのように論じてきたのかを概観する。その後、独自の調査研究として、第一に、『母親になって後悔してる』が巻き起こしたメディア現象を批判的に考察する(Ⅲ)。「後悔」はほんとうに今まで存在しなかった声なのか、女性たちが語っているのは「後悔」だけなのか。第二に、フェミニスト参加型アクションリサーチ(FPAR)の方法論から、『母親になって後悔してる』を日本の母たちが読み語りあう読書会の場を分析する(Ⅳ)。母たちは、母たちと、どのように自身の経験や感情を語り出すのか。複層的な方法論から、『母親になって後悔してる』をきっかけとしてあふれだした母たちの声を分析し、それらの語りとフェミニスト・マザリングとの接続を見出していく。

II. 母をめぐる葛藤 ——母性規範と母たちの経験

女性たちが母である自身について後悔したり葛藤したりするというこの事実は、これまでの日本社会で話題にならなかったわけでは決してない。むしろ、近代家族規範(落合 2022)そして良妻賢母イデオロギー(小山 2022)が創造され、それらが女性たちを取り囲む歴史のなかでは、女性たちは常にとまどい、葛藤し、時に抵抗してきた。

端的な例として、1994年に初編が、その後2009

年に新編が出版された岩波書店刊の叢書『日本のフェミニズム』の第5巻『母性』(天野ほか編 2009)をとりあげよう。この巻の主編者の江原由美子(2009)は解説のなかで、「母性」を女性の自然・本質とみなすのではなく、歴史的社会的に規定される制度および言説として考えることを前提とする。そのうえで、社会的に構築された「母性」が、第一には誰にどのように利用されどのような効果を生んだのか、第二にはどのように実際に子を産み育てる女性たちに影響を与えてきたのか、というふたつの問題系を提示する。加えて江原は、「『母親になる』ということが危機を孕む不連続的な過程である以上、そこにはどんな形にせよ葛藤が生まれる条件があると言うことはできるだろう」(江原 2009: 16)と述べ、第三の問題系として、「子育てにおける女性の葛藤」を挙げている。叢書のなかのこのセクションには3編の論文、木村栄「閉ざされた母性」(2009、初出は1980年)、牧野カツコ「働く母親と育児不安」(2009、初出は1983年)、要田洋江「『とまどい』と『抗議』——障害児受容過程にみる親たち」(2009、初出は1986年)が収録されている。木村は当時「育児ノイローゼ」が騒がれた専業主婦の女性の「何でもいいから子どもから逃げだしたい」ということばを(木村 2009: 197)、牧野は働く母たちの「仕事、家事、育児すべてが手をぬけるわけがなく、真剣に考えれば考えるほどむずかしくイライラする」ということばを(牧野 2009: 226)、そして要田は障害のある子を育てる母親の「この子と一緒に死のうかとか、どっか遠くへ行っちゃおうとか、それはもう、いっそのこと、この子の首しめて殺してやるうかとか、そこまで思いました」ということばを(要田 2009: 243)、それぞれ引用している。これらの引用はほんの一例に過ぎないが、『母性』と題されたアンソロジーのなかに、ただ制度や言説に対する学術的批判だけではなく、その構築された規範を生きなければならぬ女性たちの生々しい声が刻まれていることは特筆に値する。日本の母たちは葛藤や後悔を語っていたし、それを聞きとるフェミニストたちがいた、ということである。

大日向雅美『母性愛神話の罫』（2000）もまた、日本社会で母性が聖域とされ、三歳児神話が根強いことを批判的に分析する書だが、そのなかにも「母性愛神話の罫にはまる女性たち」という母たちに焦点を当てた章がある。1990年代、大日向が保健所や公民館の母親の集いに赴くと、「こんなはずではなかった」「どうしてこんなに毎日つらいの？」という母たちの涙ながらの声がこだましていた（大日向 2000: 45）。しかも、こうした母の苦悶は当時に新しいことではなく、遡れば大正時代から、日本の母たちの「母性喪失」は取り沙汰されては批判されてきた。そのような歴史の流れはつまり、近代日本においては繰り返し、女性たちが母性規範に苦しみ、声をあげ、そのたびに社会的制裁をくだされてきたということだ。すなわち、母たちの苦悶と苦闘は異常でも特殊でもなく、むしろありふれた日々の実践なのである。

より近年では、額賀美紗子・藤田結子『働く母親と階層化——仕事・家庭教育・食事をめぐるジレンマ』（2022）が、母たちの、今も綿々と続くまさに「ジレンマ」に満ちた生活を描き出している。就労する母親たちは、「お母さんがいないとかわいそう」「子どもに悪影響がでる」といった神話に対して、戦略を練り対抗的ロジックを組み立てる。たとえば、子どもと過ごせる時間が量的に少なくても質的に充実させればよい、母が働く姿を見せることは子どもの将来のためになる、というようにである。また、村田泰子『「母になること」の社会学——子育てのはじまりはフェミニズムの終わりか』（2023）においても、託児サービスや乳幼児保育を利用する母たちがそのつど罪悪感にさいなまれ、しかし早期集団保育は子どものためにより、自分のためにもなる、という利点を強調する様子が描かれる。女性たちは母性規範にとりこまれるばかりではなく、それとつねに交渉しているのである。

と同時に、額賀・藤田は異なる学歴や職業、階層の母親たちを調査対象に含めることで、そうした戦略的实践が誰にでもできることではないこと、すなわち「非大卒や非正規雇用で収入の少な

い女性は実現可能な戦略の幅が狭く、より多くのジレンマを経験していた」ことに注意を促す（額賀・藤田 2022: 62）。村田は、母親たちは個人的な不満を口にするが、彼女らがそこから社会における女性への抑圧を問題にしたり政治的権利の問題としてとらえたりすることには困難がともなう、と指摘する（村田 2023: 248）。特に2010年代の「ウーマノミクス」「女性活躍推進法」以降、女性のあいだの格差がいよいよ増大するなか（三浦 2015; Dalton 2017; 金井 2017）、そしてネオリベリズムとポストフェミニズムの社会潮流によって女性たちもまた自己責任の論理にからめとられていくなか（菊地 2019; 元橋 2021; 三浦 2022）、母の葛藤が構造的に解決されることは容易ではないといえるだろう。

しかし同時に、そうした母たちの葛藤が私的領域にとどまらず、社会的政治的行動に結びつくことも忘れてはならない。元橋利恵（2021）は日本の現代史における異なる「母親運動」の展開を追うとともに、2010年代半ばの「安保関連法に反対するママの会」に参加する女性たちにインタビュー調査を行ない、まさにこの点を明らかにする。それ以前には政治や社会運動に興味がなかった「ママの会」メンバーたちは、子どもの世話をしながら、スマートフォンを片手に、立場の近い母親どうしでつながり、反対運動のデモや政治家との面談で声をあげるに至った。それはただ子を守るという母性規範をなぞっているのではない。「『自分の子どものため』を超えて『他の子どもや母親たちのため』に社会や政治の変革を目指す、という母親たちの政治実践」なのである（元橋 2021: 205）。

したがって、『母親になって後悔してる』に立ち戻るならば、母はみな幸せなわけではない、実は苦いおもいを抱く母親もいる、という事実は、日本社会においてなら新しい事実はない。母にはいつも過剰な期待が寄せられ、それゆえに母はいつも危機のなかにおかれてきた。そのなかで葛藤し煩悶し、時に妥協し時に戦略を練り、時に抗い戦い、子のニーズと向きあってきた。この切実

で複雑な現実を見誤ってはいけない。

III. 「母の後悔」というメディア現象

ではなぜ、どのように、『母親になって後悔してる』が2020年代日本のメディアを賑わすことになったのだろうか。上述のように、『母親になって後悔してる』の日本語訳出版後、主要メディアではセンセーショナルに本書がとりあげられた。表1は筆者が収集したメディア資料の一覧だが、ほとんどの主要紙で、そして雑誌ではビジネス誌か

ら女性誌に至るまで、書評や特集が掲載されたことがわかる。

これらメディアのなかには、ふたつの異なる論調が見出せる。第一に、『母親になって後悔してる』は現代日本の問題をあぶりだし新たな視点をもたらすものだと、その社会的意義を強調するものがある。たとえば『週刊エコノミスト』では評論家の荻上チキが「『母親になったことへの後悔』について、真正面から議論するものは少ない。このことを語るのがタブー視されていたうえ、しっかり掘り下げる研究や活動も消極的であったた

表1 『母親になって後悔してる』書評・特集

媒体	著者	タイトル	出版/放送日
波 (新潮社)	柚木麻子	勇気を出して語り出した母たち	2022年3月28日
波 (新潮社)	田房永子	母の口をつぐませるもの	2022年3月28日
日本経済新聞		母親になって後悔してる オルナ・ドーナト著 重責や仕事 様々な現実の声	2022年5月14日
週刊文春 (文藝春秋)	鴻巣友季子	文春図書館 今週の必読 選択権の問題だ『母親になって後悔してる』	2022年5月19日
産経新聞	牛窪恵	『母親になって後悔してる』女性の葛藤 本質を示唆	2022年5月21日
NHK		WEB特集 “言葉にしていけない思い?” 語り始めた母親たち	2022年5月23日
週刊東洋経済 (東洋経済新報社)	渡部沙織	今週のもう1冊 後悔する母という「脅威」現代社会のタブーを破る	2022年5月30日
女性セブン (小学館)		世界12か国で議論を呼んだ書籍『母親になって後悔してる』が描く タブーに共感が殺到している理由	2022年6月2日
新潮 (新潮社)	津村記久子	私の書棚の現在地 誠実さの受難とその先	2022年6月7日
週刊金曜日 (株式会社金曜日)	太田明日香	母になることを女性に強要する社会の圧力	2022年6月10日
週刊エコノミスト (毎日新聞出版)	荻上チキ	読書日記 「母になった後悔」を分析 タブーが覆う社会的圧力	2022年6月20日
朝日新聞	寺尾沙穂	オルナ・ドーナト 「母親になって後悔してる」押し殺していた逡巡 の証言集	2022年7月23日
VERY (光文社)		『母親になって後悔してる』について	2022年8月5日
毎日新聞	清水有香	「母になって後悔してる」タブーにあらがう女性たちの赤裸々な告白	2022年8月21日
毎日新聞		#「普通」をほどく 母になった後悔 タブー乗り越える声、一冊に	2022年8月28日
NHK		クローズアップ現代 “母親の後悔” その向こうに何が	2022年12月13日

めだ」と本書の新規性を強調し、産経新聞では、マーケティングライターの中野恵が「本書を読むことで、すべての女性に共通する悩みや葛藤、自己肯定(否定)の本質が見えてくるはずだ」と高く評している。朝日新聞では、音楽家・エッセイストの寺尾紗穂が、「まず自分を愛せ、というメッセージはすべての母親に、今改めて伝えられてよいものだろう」と、『新潮』では、小説家の津村記久子が、「母親という役割を賞賛しながら、同時に社会の歪みを引き受けさせる神話の呪いを解体する一冊だと思う」と、それぞれ書評を締め括っている。このように、『母親になって後悔してる』には、日本社会において「タブー視」されていた母の後悔を明るみに出し、「すべての女性」「すべての母親」のために、「呪いを解体」してくれる、と大きな期待が寄せられている。

女性誌でも、『母親になって後悔してる』に注目するものがあつた。なかでもファッション雑誌『VERY』(光文社)では、2022年9月号で『母親になって後悔してる』について」という4ページの特集記事を掲載し、冒頭、看板モデル申真衣と本書の訳者鹿田昌美による対談には、「『後悔』を語ることが、母が主体的に生きるきっかけになればと思っています」というキャプションが付されている。続いて、「『母親になって後悔してる』を読んだ私がVERY読者に伝えたいこと」として、4名の識者がコメントを寄せている。なかでもジャーナリストの北丸雄二は「母親の後悔は新自由主義社会の猪突猛進の社会に対する異議申し立てです。別の社会の在り方を提示し現代社会3.0に更新する起爆剤となりうる、とてもポジティブなものだ」と激賞する。『VERY』は長く専業主婦を主たる読者層とし、1990年代には夫や子に尽くすだけでなく自身のファッションや趣味にも興じる「新専業主婦像」の確立に一役を買った雑誌である(米澤 2014)。その誌面において、「幸せな主婦」とはいわば対極にあるともいえる「後悔する母」がこのように好意的にとりあげられたことは注目に値する。加えて、『女性セブン』2022年6月16日号でも、「『母親になって後悔してる』が描く

タブーに共感が殺到している理由」という3ページの特集が生まれ、母たちの声を紹介するとともに、社会学者の元橋利恵による解説、翻訳家・エッセイストの村井理子の感想を掲載している。「母親たちが心の奥底にしまってきた本当の気持ちを見直すことが、新しい社会をつくる一歩になるのかもしれない」という結語もまた、「母の後悔」に期待を寄せるものである。

テレビ番組ではNHKがこの本を大きくとりあげ、まず2022年5月の「Web特集“言葉にしていけない思い?”語り始めた母親たち」で本書を紹介したあと、2022年12月には『クローズアップ現代』で“母親の後悔”その向こうに何がが放映された。『クローズアップ現代』では作家の湊かなえ、山崎ナオコらが出演し見解を述べるとともに、NPOによる新たな取組みなども紹介し、「母の後悔」が社会を変える力をもつことを強調している。このように、『母親になって後悔してる』は日本の主要メディアにおいて、新たな問題提起の書、社会変革の書として、賞賛されたことがわかる。

第二に、この本により特徴的なこととして、自身も母である読者が自らの経験や感情をあらわにしながら本書について語る、という論調がある。たとえば出版元である新潮社の『波』2022年4月号には、出版記念として漫画家の田房永子と小説家の柚木麻子がそれぞれ書評を寄せているが、田房の漫画エッセイには、田房自身が「私も2人の子どもを育てていてそのことに後悔はないけど／たまに／自分の持つ「母の力」に自分自身が圧倒されて疲へいする時がある／この威力だけしばらく手放したい時がある…」と目を回すコマがある。柚木は冒頭で、自身の産褥期の経験を以下のように鮮明に叙述する。

私は病室を出て、壁に身体をもたせ、ほとんど感覚のない下半身を引かずりながら、這うようにして下の階にある売店に向かった。足の間から悪露が流れ続けていた。その時のことを今も繰り返し思い出す。まるで貞子のよ

うに通路をズルズル歩く顔面蒼白の私を見て、入院患者たちはぎょっとした顔で振り返った。エレベーターが開くなり、私は床に崩れ落ちた。他の乗客がいなかったの、ほとんど寝そべって四角い天井を見上げながら、大変なことになっちゃった、と思った。身体は言うことをきかないし、これから自己責任で全部一人で決めて自分で動かないと、赤ちゃんが死んじゃう。

ドーナトのインタビュー調査に触発されたかのように、母である評者たちが自らの母としての経験について生々しいことばを綴っているのである。

ソーシャルメディア上でも、こうした痛切な声が多く聞かれた¹。翻訳家・エッセイストの村井理子は、出版後まもない2022年3月25日に、ツイッター(当時)上に本書の書影とともに「はあ、わかる。わかりみ本線日本海。ああああ、どうしたらいいのやこの気持ち」と、ユーモラスに共感をつぶやき、反響を呼んだ。村井は上記の『女性セブン』の特集においてもインタビューにこたえ、「この人生を選んだのは正しかったのかと自問し涙があふれ、まったく緑のない土地にある小さな部屋に住む自分の未来をしばらく考えたこともあるんです」と、述べている。2024年6月現在、村井による最初のツイートには8,000件以上の「いいね」が寄せられ、「つらい」「悩み」「しんどい」といった言葉がリプライに並んでいる。上記のNHK『クローズアップ現代』の放映後には、「#母親になって後悔」というハッシュタグが登場し、母たちの共感が次々にソーシャルメディア上に現れた。匿名個人のツイートを直接引用することはここでは避けるが、「これは私のことだ」「私だけではなかった」「子どもはかわいけれどつらい」といった表現が繰り返し用いられ、母たちの日々の悩みや苦労が吐露されている。

このように、日本社会において『母親になって後悔してる』は、一方では社会的意義が喧伝され、他方では母たちがきわめて個人的で秘匿的な経験

や感情を語るきっかけとなった。日本の女性たちもまた、母であることに疲れた、母であることがいやになる、なぜ母になったのだろう、と口に出す。それはつまり、母であることは女性の天分でも本質でもないということの意味し、伝統的に信じられてきた「母性」を脱神話化する語りにも他ならない。同時に、母性イデオロギーがいかにも母たちを呪縛するものであるか、いかに女性たちの生を制約するものであるか、批判的に暴き立てる。このような問題提起の書が大手出版社から発刊され、刷を重ね、メディアでたびたび話題になるほどには、日本社会において、ジェンダーや家族の問題を批判的に議論する土壌ができてきたとも言えるだろう。言うまでもなくその背後にあるのは、Ⅱで論じたような、日本のフェミニズムの長く重い蓄積に他ならない。

しかしながら、このメディア現象にはあやうい側面がある。第一に、すでにⅡで述べたように、これまで日本社会において母たちがネガティブな経験や感情を吐露したことがないわけでは決してない。たしかに母性イデオロギーは沈黙や抑圧を強いるものであるが、しかし、母たちは完全に声を奪われてきたわけではない。しかし「母の後悔」のメディア表象は、あたかも女性たちの悲痛な声を初めて聞いたかのように扱い、翻って、女性たちを「沈黙する／してきた母」という虚像のもとにおく。さらには、第二に、その誤った前提から、母たちがもっと後悔を口に出し、「本当の気持ちを見直す」こと、「自分を愛す」こと、「主体的に生きる」こと、すなわち、女性たち自身が変容することを促しすらする。そのとき、誰がどのように母たちの声を無視してきたのかが顧みられることはない。ほんやりと「社会」が批判されることはあっても、母たちを時に無視し、時に罰してきた家父長制的権力そのものは不問に付されたままなのである。

そもそも、本書をきっかけとしてメディア上で語られる女性たちの経験を丁寧に読めば、それが、ただ「後悔」だけではないことに気づく。たとえば田房永子の目の回るような混乱は、もうや

めたいという「後悔」ではなく、日々続く子とのかかわりのなかでおとずれる混沌への反応ではないか。柚木麻子が病院のエレベーターに横たわりながら感じていた絶望も、産まなければよかったという「後悔」ではなく、突然はじまった母としての身体と生活への困惑ではないか。マスメディア上でもソーシャルメディア上でも、女性たちは「後悔はしていないけれど」と前置きをしつつ、日々の子育てのただなかで押し寄せる心情を吐露していて、必ずしも過去に戻りたいという願いを語っているのではない。そうした複雑な母たちの経験や感情を、ただそこに苦しみがあるからといって「母の後悔」などとセンセーショナルにもてはやすのではなく、まずそこで語られる内実に耳を傾けなければならない。と同時に、それを軽視し不可視化してきた社会の構造が何なのか、そしてそれをどう変えていくかを考えなければならない。

このように、『母親になって後悔してる』をめぐるメディア現象は、新たな言説空間を切りひらくようにみえるが、しかしそれは実は今までにもあった母たちの声——あったけれど社会がじゅうぶんに聞いてこなかった声——を不可視化する効果ももちうる。さらには、構造的問題に目を伏せて無責任に、母たちに社会変革を託すことさえある。母たちは何を語りたのか、なのに何が聞かれていないのか、より丁寧に考察しなければならない。

IV. 母たちが／と読む『母親になって後悔してる』

1. フェミニスト参加型アクションリサーチ (FPAR)

このような問題意識から筆者は、母である女性たちが『母親になって後悔してる』をどのように読み、その経験についてどのように語るのかを経験的に調査することを試みた。具体的には、自治体で開催される読書会にファシリテーターとして参加し、他の参加者たちとともに『母親になって後悔してる』について語りあい、そこでの会話

データを収集した。

この調査は、フェミニスト参加型アクションリサーチ (Feminist Participatory Action Research, FPAR) の方法論のもとに行なった。FPARは、調査者である女性と被調査者である女性という二項対立の関係を前提としない。両者を共同調査者とみなし、その関わりあいのなかで生じる気づきやエンパワーメントに注目する。たとえばFPARの提唱者であるパトリア・マグワイア (Patricia Maguire) は、グアテマラにおいて、親密な関係における暴力の被害にあったことのある少数民族の女性たちと協働して調査を行なう (Maguire 1997)。インタビューのなかでは、「なぜそんなことが起きるのだとおもう?」「何が原因だとおもう?」と繰り返し問いかけ、対話することで、彼女らが経験したことが個人的な問題ではなく社会の構造——男性が女性を殴ることを正当化するような家父長制の構造——によるものであったことに気づきを促す。このように、FPARにおいては、調査者は透明な観察者などでは決してなく、そのコミュニティに積極的に変化をもたらそうとする。特に目指されるのは、マグワイアが体現したように、これまで光を当てられなかった女性たちの経験を対話を通じて言語化し、そうするなかで女性たちが相互関係のなかでエンパワーされることである。

したがって、『母親になって後悔してる』の読書会においてFPARを実践するということは、調査者である筆者が、参加者の発言をただ静かに聞くだけではなく、積極的に会話に参加し、参加者らと語りあい、学びあい、批判的に考え、新たな気づきやエンパワーメントを得ようと働きかけることを意味する。筆者は会話をとりしきるファシリテーターであると同時にひとりの母であり、また日本の母について考察してきた研究者でもある。この複雑な立場から、参加者たち——彼女ら彼らもまたそれぞれ複雑である——と関わりあうなかで生まれた語りを分析していく。

調査は、首都圏の自治体Xと自治体Yにおいて行なった²。いずれも筆者が講演等で訪れたことが

ある関係で、それぞれの担当職員の協力を得て、2022年から2023年の間に自治体Xで2回、自治体Yは1回、読書会を開催する運びとなった。自治体Xでは、第一回に女性6名、男性1名、第二回に女性5名、男性2名（うち連続参加者5名）の参加があり、2名の担当職員も参加した。自治体Yでは「母親のためのイベント」と銘打ったため子どもがいる女性のみ16名の参加があり、担当職員4名も参加した。いずれも、冒頭で筆者が調査について説明するとともに『母親になって後悔してる』について短い解説を行ない、その後、2-4名のグループディスカッションにおいて意見交換をしたのち、そのディスカッションを共有するかたちで全体で話しあった。自治体Xでは円になって座り互いの顔が見えやすい、こぢんまりとした雰囲気であったのに対し、自治体Yでは筆者が会場前方に立ち、参加者は4組に分かれて座る、ワークショップ的な雰囲気となった。いずれにおいても話題が途切れることはなく、グループディスカッションでも全体ディスカッションでも次々に話したいことがあふれ出る様子であった。会の終了後も30分から1時間ほど参加者どうしが会話を続けたり、筆者に質問や相談をしたりする光景がみられた。

以下では、これら読書会の実践において、母たちが、母たちと、どのように『母親になって後悔してる』について語りあったのかを分析する。したがって、自治体Xでは母ではない女性や男性の参加者もおり興味深いやりとりがあったものの、本論文においては母である参加者の発話を主にみていく。

2. 母たちの共感

いずれの読書会においても顕著であったのは、母たちが母であることのしんどさを互いに吐露しあい、そこにあたたかい共感が立ちあがる、という光景であった。『母親になって後悔してる』を家で読むときは家族にタイトルを見られないよう隠していた、という話題を筆頭に、第二子をどうするのかなどと聞かれるのが苦痛だ、義母や実母と

の関係がストレスだ、「イクメン」という言葉に腹が立つ、など共通の感情をわかちあう「ママあるある」が笑いを誘った。自治体Xでは、職員の一人が自分は母親ではないが友人の子どもがトイレにまでついていこうとするのを見て驚いた、と話したことを受け、母である参加者たちがもりあがる場面があった。

筆者：まさに生まれ変わりですよ。トイレにも行けない。そういう生活の基盤の部分から覆されるというか。それはでも、子育てあるあるですよ、トイレに行けないのは、ほんとうに膀胱炎になるかっていうぐらい。

あいばさん：ドア開けっ放し。常に開放していますみたいな。

筆者：お風呂に入れば空耳が聞こえるし。今まで当たり前のように湯舟に浸かっていたとかお手洗いに座っていたということが成り立たなくなってくる。

かとうさん：今のお話を伺って、私は3人産んで、自分の時間だけではなく自分の生存に必要な睡眠の時間も削られているし、削らないと生きていけない子たちを目の前にしたときに、当然、それをしないとできない。自分の時間を作ることが贅沢の贅沢みたいな。それをばっと思い出しました。自分の時間すら考えられないぐらい。皆さんもそうだったかもしれませんが、それこそ、髪の毛をとかすということもたぶんしていなかったと思うんですよ。基礎的な、女性としてということの前に全部、母としてということがある。

あいばさん：わかります。睡眠時間を削られたときは、ほんとうに気が狂いそうになる。

このように、3名の母親、すなわち、あいばさん、かとうさん、そして筆者が、母のしんどさを軽口まじりに言いあい笑いが起きたあと、さわぐちさんが、次のように述べた。

さわぐちさん：この本に書いてあるように、

子どもを大事に思っていることと、母親として見られることと課せられるもののつらさを吐露することは、ほんとうは別の話ってどうか。だけど、どうも世の中から一緒くたにされてしまう。そういうのも全部含めて母である幸せみたいなものをみんながもっている、もつべきだとか。そういう前提があるのではないかという、それがつらい。だって、子どもといっても他人じゃないですか。他人の人生、特に子どもが小さい時は100%私が背負っているという状態はものすごく、こんな重たい責任を背負わされたことはないし、そんなことは誰も教えてくれなかった、と私は思ったんですね。

さわぐちさんの「つらい」「100%私が背負っている」「誰も教えてくれなかった」という痛切な語りには水を打ったように静かになり、参加者たちはみな深く頷きながら聞き入っていた。先ほどのあたたかい笑いとはまた違う、より胸に迫るような共感が広がった。

同様に自治体Yにおいても、母親が背負わされるものの重さを語る参加者が相次いだ。以下は、たかのさん、なかいさんがそれぞれのグループを代表して、話しあった内容を会場全体に共有した際の抜粋である。

たかのさん：コロナ禍に子育てをしていて、今、コロナ禍とアフターで違いがある、みたいな話が出てきました。すべての決定を母親がしていかなきゃいけないという呪縛が、やっぱりすごいつらいって。これって正しかったんだろうかっていうのがあって。子どもを育てるといふことの結果論が、どこの時点の結果論、結果なのかっていうことを考えると、やっぱりすごい怖いなという感じがしました。

なかいさん：子どもを産んだことは後悔してないんですけど、母親ってプレッ

シャーっていいですか、先ほどもお話ありましたが、母親が何でも決めないといけない。子育ては2人でしてるはずなのに、たとえば母親にだけ負担が来る。それで、そのプレッシャーだったり、あと、社会的に追い詰められるような感じがする。

「すべての決定を母親がしていかなきゃいけない」「母親にだけ負担がくる」——いずれの発言においても、同じテーブルに座っていた参加者はもちろんのこと、他の参加者たちもあいづちをうったりメモをとったりしながら聞き入っていた。このように、読書会は母たちが母たちの真摯なことを受けとめあう、共感の場となった。

3. 母たちによる批判的分析

さらに参加者たちは、ただ不満を言いあうだけではなく、その経験を批判的に見つめ直してもいた。「一緒くたにされてしまう」「母は幸せであるという前提がある」（さわぐちさん）、「母親にだけ負担が来る」「社会的に追い詰められる」（なかいさん）という上記の発言は、母たちが背負わされた「呪縛」や「プレッシャー」を言語化しつつ、その背後に性別分業観や良妻賢母イデオロギーが根強い日本社会があることを見抜くものである。

自治体Yでは、同じ親であるにもかかわらず、そうした「呪縛」「プレッシャー」から自由な父親について鋭い言及が相次いだ。

はしもとさん：母親になって後悔してるっていうけど、父親になって後悔してるっていうのはないかね。

筆者：いかがでしょう。どなたでも。

まるおさん：私は共働きで、家事もほとんど半分半分にしてもらってるんですけど、そうするとやっぱり、夫も結構、自分の時間がないみたいで。平日は、仕事終わったあと、私が保育園にお迎えに行き、お風呂に入れて、その間に夫が夜ご飯を作って、ご飯を食べさせて、そのあとの洗い物までしてもら

んで。そうするとやっぱりたいへんで。父親になって後悔してるって話じゃないんですけど、なんで子育て世代って、こんなふうな時間に追われなきゃいけないんだろう、もっと何かうまいやり方ないのかなっていうのを、いつも言ってるので。

やぐちさん：私は育休中なんですけど、夫は朝7時に家を出て、帰ってくるのは夜10時、11時。つまり、子ども起きてる時間に夫はいないんです。そうすると、はっきり言うと毎日、孤独だになって、すごい思ってる。だから、先ほどおっしゃった方みたいに、夫も早く仕事から帰ってきて、夜一緒に食事とかお風呂とか手分けするっていうのが、すごいうらやましいなっていうのをずっと思ってたんです。だからたぶん、そういう男性と、うちみたいにずっと仕事みたいな男性とか、いろんな男性もいると思うんで、それによって後悔は違うかなって。私は朝起きた瞬間から夜寝る時間まで全部育児で、でも、夫のほうはそういう時間はない。どう思ってるのかなっていうか、この人の人生これでいいのかな、みたいな。

筆者：なるほど。おそらく、おつれあい個人を責めるということではなくて、そのようにさせる企業文化があったり、働き方の問題もあったりするんですよね。だからおっしゃるとおりで、この本を見たときの男性の反応として、共働きで50:50でやってる人と、妻にワンオペで任せて何もしませんという人と、「後悔」って言われたときの、想像力の幅が違うだろうなという気はしますね。

やぐちさんの「この人(夫)の人生これでいいのかな」に対しては会場から笑いが起きたが、そのあと筆者が「おそらく、おつれあい個人を責めるということではなく」と口を挟み、これが社会的な問題であるという方向に議論を進めようとしたときにも、多くの参加者がうなずいてみせた。はしもとさんの疑問をきっかけにふたりの対比的な

状況が述べられたことで、「いろんな男性もいる」「後悔は違う」「想像力の幅が違う」といった気付きも得られた。まさに、個人的な悩みを構造的な問題として理解しようとするFPARの試みだが、参加者たちはこの枠組みを共有し、ともに分析的に考えることとなったと言えるだろう。

4. 「後悔」を超えて

読書会においてはいずれも、上記のように「後悔」というキーワードを使う発言が多くあったが、その微細な意味あいには注意が必要である。参加者のなかには、一方には、「私も後悔している」とはっきりと口に出す女性がいた。

いしやまさん：先ほど、[ドーナトによる]一番最初の二つの質問がありましたけど、私は自信があって。「過去に戻って産みますか」「母親の利点はあるか」ですけど、皆さんにうかがってると、たぶん、「Yes、Yes」か「Yes、No」で揺れてる、みたいなのところだと思うんですけど。私はこの部屋で一人かもなんですけど、私、たぶん「No、No」で。それってかなり珍しいというか、強い感情なんだなというのを初めて自覚しました。

こうした発言も参加者たちはあたたかく受け入れており、読書会は、母たちが母の後悔を、非難や批判を怖れずにオープンに語るができる場であった。

他方、いしやまさんが自分のことを「かなり珍しい」と言っているように、自治体Xにおいても自治体Yにおいても、上記のなかいさんのように「後悔はしていないけれど」という語り方をする参加者が多くみられた。以下、自治体Xでしたみちさんが自身について、自治体Yでちかのさんが同じグループの参加者について、それぞれ述べた抜粋である。

したみちさん：母親になって後悔はしていませんが、なぜ母親になってしまったのかなと

いう気持ちもあって。それ以前に、なぜ結婚してしまったのかなというのもあって。当たり前前に社会で生きてきて、学生時代は社会に出て働くために教育を受けてきたというイメージで過ごしてきたんですが、社会で働きだして何となく結婚して、そして母親になってという。私は社会に出て働くことしか考えていなかったのに、なぜ結婚して子どもを産んでしまったんだろうなど。

ちかのさん：グループで最初に、母親になって後悔してるか、してないか、みたいな話をちょっとしたんですけども、していないって言っている人もいれば、後悔をしているかもしれないし、してないかもしれないってところを行ったり来たりしている状態ですという方があったりしました。あと、最初のほうに出てきた、母親になっての利点って何だろうって、子どもを通して価値観が変わったり、意識が変わったりすることもあったので、利点と言えばそこが利点かなって意見とか、あとは、純粹に子どもがかわいくて、子育てしているのが楽しいから、それが利点なんじゃないかなって方もいました。

さらに自治体Yでは、にしなさんから「今は後悔していないけれど」という興味深い発言があった。

にしなさん：私は、後悔していないというほうの人なんですけども、それは、今日の今段階のことで、今後、まだ娘が今、2歳なんですけど、10年後、20年後、何か起こったときに、それが後悔に変わることもあると思うんですよ。なので、これからどうなっていくかということの不安とか心配ってということが、この後悔っていう言葉になっていくのかなって感じました。

明らかに、ここで参加者たちが述べているの

は絶望的な「後悔」だけではない。いしやまさんの「後悔」とは対照的に、したみちさんのように結婚・出産という選択について改めて問い直してみたり、ちかのさんたちのように後悔とは相反する感情もあることに気づいたり、あるいはにしなさんのように今後も続いていく過程のなかで「後悔」を考えてみたりと、彼女らは現時点での後悔だけではなく、より長い時間軸のなかで、より日々の実践にもとづいて、さまざまな感情が入り乱れる様態を語っている。

このように読書会では、母たちが母としての経験をともに言葉にし、正直なおもいを語りあい認めあう場面が多くみられた。『母親になって後悔してる』は、そのための有効な触媒であったといえる。参加者たちは時に笑い、時に深くうなずき、あたたかい共感の場をつくりだしていた。協働して、母親に課される重荷を見つめなおし、疑い、批判的にとらえかえし、時にそのまなざしを夫／父に向けてもいた。さらに自身の経験を振りかえるなかで、後悔を口にする参加者もいれば、より複雑な感情や経験を表す参加者もいた。こうした対話の実践は、まさにFPARの方法論によるところであり、自身の経験を自身のことばで語りあい見つめなおすというエンパワーメントが生まれた(Maguire 1997)。そしてこうした場においてであったからこそ、「後悔しているか、いないか」だけではなく、そのどちらでもありどちらでもないような、日々の実感にもとづく複雑な感情——「行ったり来たりしてる状態」「これからどうなっていくかということの不安とか心配」——を聞きとることができたといえる。

V. フェミニスト・マザリングの可能性

本論文では、『母親になって後悔してる』が現代日本社会に巻き起こしたメディア・センセーションを批判的に分析してきた。たしかに「母の後悔」は社会に衝撃をもたらすものである。しかし、フェミニズムの分野で研究者たちが明らかにしてきたように、さらに、本論文が母である評者たち

の言葉やソーシャルメディア上の共感、そして読書会での対話を分析することによって明らかにしたように、「母の後悔」は少なくとも日本においては今初めて見つかったものでもなければ、母たちが抱える感情をすべて覆うものでもない。母たちは「後悔はしていないけど」と前置きをしながら、「誰も教えてくれなかった」という困惑、「なぜこうなったんだろう」という混乱、「これからどうなるかわからない」という不安を語っていた。トイレも睡眠もままならない、全部自分が決断しなければならない、ずっと子どもと向きあい続けなければならない、という日々のしんどさを言葉にしていた。しかもそこには「子どもを通して価値観が変わった」「子どもがかわいい」「子育てが楽しい」という感情もまた入り乱れる。女性たちが言葉を尽くして語っていたのは、必ずしも母になったことへの「後悔」だけではなく、日々刻一刻と揺れ動く切実で複雑な母の現実であった。

最後に、母たちが語りだすこの複雑な現実がフェミニズムに通じるものであることを強調しよう。

読書会の参加者たちが語っていたように、母たちは矛盾や葛藤を抱えながら、常に変化する子どものニーズと際限なく向きあい続ける。その「母をすること／マザリング」には、否応なしに、目の前にいる子どもが育つ社会について思い悩み、考え、行動することが含まれる (Ruddick 1989; O'Reilly 2004)。まさに、「子どもを通して価値観が変わったり、意識が変わったりすること」(ちかのさん)を経験するのである。そこには当然、目の前の社会制度に疑義を抱くこと、「家父長制的な母性規範がいかに女性を構造的に抑圧し軽視するものか、いかに子どもや男性にも弊害をもたらすものであるか、批判的に気づくこと」、すなわち、「フェミニスト・マザリング」(Green 2012: 72)の可能性も含まれるだろう。元橋利恵 (2021)はそれを「政治実践」と呼んでいたし、村田泰子 (2023)も以下のように述べる。

実際のところ、子どもが小さい時期というの

は、社会の矛盾を一身に引き受け、なぜ自分ばかりがこんな目にあわないといけないのか、なぜこんなにしんどい思いをしなければならぬのかと自問する時期でもある。そのような状況におかれた女性たちが、そのやむにやまれぬ状況のなかからあみ出す言葉や実践に、わたしは関心がある。(村田 2023: 69)

読書会のなかで聞かれた日々のしんどさやそれへの共感、批判的な問いかけや問い直しの語りもまた、母たちの「やむにやまれぬ状況のなかからあみ出す言葉や実践」に他ならない。連続と続く母としての生活のなかで、複雑なおもいを抱え続け、他者をケアし続ける——そうした毎日の実践のことは、ただ個人的なもの、一時的なものとして切り捨てず、あるいは「後悔」などとセンセーショナルにあおりたてず、その複雑性のなかにこそ「フェミニスト・マザリング」をみつめていかなければならない。

謝辞

本研究は、JSPS科学研究費基金23K28342の助成を受けたものである。「マザリング研究会」では、研究分担者・研究協力者から多くの示唆を得た。また、自治体X・自治体Yでの調査にあたっては、職員・参加者の皆さまに多大なるご協力をいただいた。記して感謝したい。

注

- 1 ソーシャルメディア上では、『母親になって後悔してる』にはネガティブな反応もみられた。NHKのウェブ特集「言葉にははいけない思い？」語り始めた母親たち」(<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220523/k10013634851000.html>)にあるように、「子どもに失礼」「後悔するなら産むべきではない」などと母たちを伝統的規範から逸脱する者として、あるいは愛すべき子どもや家族を裏切る者として、非難する声である。
- 2 本調査は津田塾大学倫理審査委員会による承認を受け、自治体X・Yの許可を得て実施した。

読書会の冒頭に口頭と書面とで調査の目的と倫理的配慮について説明し、参加者の同意を得た。本論文中では参加者個人の同意を避けるため、読書会の詳細および参加者の具体的なプロフィールについては記載を避ける。データ中の参加者名はすべて仮名である。

参考文献

- 天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編, 2009, 『新編日本のフェミニズム5 母性』岩波書店.
- Dalton, Emma, 2017, "Womenomics, 'Equality' and Abe's Neo-liberal Strategy to Make Japanese Women Shine," *Social Science Japan Journal*, 20(1): pp.95-105.
- Donath, Orna, 2017, *Regretting Motherhood: A Study*, Berkeley, North Atlantic Books. (鹿田昌美訳, 2022, 『母親になって後悔してる』新潮社).
- 江原由美子, 2009, 「制度としての母性」天野正子ほか編『新編日本のフェミニズム5 母性』岩波書店.
- Green, Fiona Joy, 2011, *Practicing Feminist Mothering*, Winnipeg, ARP Books.
- 金井淑子, 2017, 「男女共同参画の〈規範性〉への問い(1)」『横浜市立大学論叢人文科学系列』68(2): 141-189.
- 菊地夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム——「女子力」とネオリベラリズム』, 大月書店.
- 木村栄, 2009, 「閉ざされた母性」天野正子ほか編『新編日本のフェミニズム5 母性』岩波書店.
- 小山静子, 2022, 『良妻賢母という規範【新装改訂版】』勁草書房.
- Maguire, Patricia, 1987, *Doing Participatory Research: A Feminist Approach*, Boston, University of Massachusetts Press.
- 牧野カツコ, 2009, 「働く母親と育児不安」天野正子ほか編『新編日本のフェミニズム5 母性』岩波書店.
- 三浦まり, 2015, 「新自由主義的母性——『女性の活躍』政策の矛盾」『ジェンダー研究』第18号: pp. 53-68.
- . 2022, 「『ケアの危機』の政治——新自由主義的母性の新展開」『年報政治学』20022-1号: pp.96-118.
- 元橋利恵, 2021, 『母性の抑圧と抵抗——ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』, 晃洋書房.
- 村田泰子, 2023, 『「母になること」の社会学——子育てのはじまりはフェミニズムの終わりか』昭和堂.
- 額賀美紗子・藤田結子, 2022, 『働く母親と階層化——仕事・家庭教育・食事をめぐるジレンマ』勁草書房.
- 落合恵美子, 2022, 『近代家族とフェミニズム【増補新版】』勁草書房.
- 大日向雅美, 2000, 『母性愛神話の罨』日本評論社.
- O'Reilly, Andrea, 2004, "Introduction," In Andrea O'Reilly ed., *From Motherhood to Mothering: The Legacy of Adrienne Rich's Of Woman Born*, Albany, SUNY Press.
- Ruddick, Sara, 1989, *Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace*, London, The Women's Press.
- 要田洋江, 2009, 「『とまどい』と『抗議』——障害児受容過程にみる親たち」天野正子ほか編『新編日本のフェミニズム5 母性』岩波書店.
- 米澤泉, 2014, 『「女子」の誕生』勁草書房.

掲載決定日：2024年6月7日

Abstract

Mothers Reading *Regretting Motherhood*: A Feminist Participatory Action Research

Aya Kitamura*

Regretting Motherhood (Donath 2017), an Israeli sociologist's interview research with regretting mothers, has spurred a heated debate over motherhood in Japan. This paper begins with an overview of Japanese feminist scholarship to illustrate how maternal regret and conflict have been researched long before the media sensation. The subsequent media analysis reveals that the book reviews and special features of *Regretting Motherhood* in Japanese newspapers, magazines and TV shows misleadingly celebrate the book's novelty and thus neglect the mothers' real voices that have existed throughout Japanese modern history. Furthermore, critically reflecting on the media discourses in Japan and drawing on the methodology of Feminist Participatory Action Research (FPAR), this paper analyzes the conversational data from book-circle events that I facilitated in two local community centers to discuss *Regretting Motherhood* with other mothers. Many participants exchanged with much empathy their private feelings and experiences that they had not verbalized before, and the participants and I collaboratively related them to the structural sexism. Through the multidimensional analysis, this paper illuminates how the actual mothers' complex experiences point toward possibilities of feminist mothering within the women's everyday struggles.

Keywords: maternal regret, feminist participatory action research (FPAR), feminist mothering

* Associate Professor, Tsuda University